『埼玉大学紀要（教養学部）』第 59 巻第 2 号、2024 年

明治・大正期の雑誌を資料とした「満ちる」「満たす」の格体制の調査

―構成物を表す「～ヲ以テ」「～ニテ・～デ」「～ニ」の分布の異なり―

A Survey of the Case Patterns of "*Michiru*" and "*Mitasu*" Using Magazines in the *Meiji* and *Taisho* Periods:
Focusing on the Distribution of Material Phrases "N-*omotte*", "N-*nite* / N-*de*" and "N-*ni*"

川野 靖子*
KAWANO, Yasuko

現代語の「満ちる」「満たす」は、位置変化用法（e.g., グラスに水が満ちる）と状態変化用法（e.g., グラスが水で満ちる）を持つ。しかし、かつての日本語では状況が異なっており、少なくとも中世までは、基本的に位置変化用法しかないことを、川野 (2023) で指摘した。それでは、これらの動詞は、いつ頃、どのように、状態変化用法を獲得したのだろうか。この問題を明らかにするための基礎調査として、本稿では、明治・大正期の雑誌を調査し、当該動詞の状態変化用法の様相について、次のことを指摘した。

①状態変化用法の文型として、(a) 構成物を「ニ」で表示する文型、(b)「ヲ以テ」で表示する文型、(c)「ニテ・デ」で表示する文型が確認できる。このうち (b) と (c) は、意味用法において同系列の文型と考えられ、調査資料の文体が文語体から口語体へ移行するのに伴い、(b) から (c) へと移行したと考えられる。

②スペースが物理的に埋まることを表す場合は、文型 (b)(c) が用いられやすい。これに対し、「スペースが埋まる」という述べ方を通して比喩的に、対象が持つ感情や性質の程度の甚だしさを表す場合は、文型 (a) が用いられやすい。

キーワード：壁塗り代換、満ち欠け代換、状態変化

1．はじめに

本稿では、明治・大正期の雑誌を資料として、自動詞「満ちる」及び他動詞「満たす」の格体制を調査する。以下で、なぜこのような調査を行うのかについて述べたい。

現代語においては、「満ちる」は「隙間なくいっぱいになる」という出来事を表す際、(1a) のような格体制と (1b) のような格体制をとることができる。

* かわの・やすこ、埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授、日本語学

(1)a. グラスに水が満ちる
　b. グラスが水で満ちる

(1a) と (1b) は現実世界の同じ出来事を指示しているが、その出来事をどのように類型化して述べるかが異なっている。(1a) は、「隙間なくいっぱいになる」という出来事を、「水がグラスに存在するようになる」という捉え方で述べた文であり、水の位置変化を表す文である。これに対し (1b) は、同じ出来事を「グラスの様子が変化する」という捉え方で述べた文であり、グラスの状態変化を表す文である。このように、「満ちる」は、位置変化動詞としての用法（以下、位置変化用法）と状態変化動詞としての用法（以下、状態変化用法）を持ち、格体制の交替を起こす。つまり、次のように整理できる。

(2)a. グラスに水が満ちる（位置変化用法）
　b. グラスが水で満ちる（状態変化用法）

同様のことが、「満ちる」に対応する他動詞「満たす」でも観察される。次の (3) が示すように、「満たす」も、「隙間なくいっぱいにする」という出来事を表す際、(3a) のような位置変化用法と (3b) のような状態変化用法を持つ。

(3)a. グラスに水を満たす（位置変化用法）
　b. グラスを水で満たす（状態変化用法）

以上のように、現代語の「満ちる」「満たす」は位置変化用法と状態変化用法を持つ[1]。しかし、かつての日本語では状況が異なっており、少なくとも中世までは、自動詞「満ちる (満つ)」他動詞「満たす (満つ)」ともに、基本的に位置変化用法しかないことを、川野 (2023) で指摘した。

つまり、「満ちる」「満たす」の状態変化用法の出現は近世以降だと考えられるのであるが、これらの動詞は、いつ頃、どのように、状態変化用法を獲得したのだろうか。

この問題の解明に関わる研究として林 (1999) があり、そこでは、本稿のいう状態変化用法の 1 つに該当する用例が、明治・大正期の資料に見られることが指摘されている。しかし、2 節で詳しく述べるように、当該時期における「満ちる」「満たす」の状態変化用法の全体像が明らかにされているわけではない（林 (1999) は、そもそも、そのようなことを目的としたものではない）。

そこで本稿では、「「満ちる」「満たす」は、いつ頃、どのように、状態変化用法を獲得したのか」という問題を明らかにするための基礎調査として、明治・大正期の雑誌を調査し、当該資料における「満ちる」「満たす」の状態変化用法の全体像を記述する。

---

[1] (1) ～ (3) のような格体制の交替現象は、壁塗り代換（あるいは「壁塗り交替」「場所格交替」等）と呼ばれている。壁塗り代換に関する詳細は、奥津 (1981)、岸本 (2001)、川野 (2021) 等を参照のこと。

2. 先行研究

「満ちる」の格体制について歴史的な観点から言及している研究に、前述した林 (1999) がある[2]。林(1999) の研究対象は、「レモンはビタミンCに富む」「自信に満ちている」「情熱にあふれる」「迫力に欠ける」のような、「ニ格をとる言い回し」であり、このような表現がいつ頃から出現するようになったのかを調査している。そして、「満ちる (満つ)」について、このような文型をとっている用例は近代以前の資料では 2 例しか見出せず、それが「近代の文学作品を見ると急増する」（林 1999:431）と指摘している[3]。

この、「彼は自信に満ちている」のような表現は、本稿のいう状態変化用法の 1 つに当たる。冒頭で見た (1) の例と併せて、このことを確認したい。

(4) a. グラスに水が満ちる（位置変化用法）
　b. グラスが水で満ちる（状態変化用法）　　=(1)
(5) a. 彼には自信が満ちている（位置変化用法）
　b. 彼は自信に満ちている（状態変化用法）

前述のように、(4) の「満ちる」は「隙間なくいっぱいになる」という出来事を表す。これと同じように (5) の「満ちる」も、「彼」を容器に見立て、そこに「自信」が「隙間なくいっぱいになる」ということを述べることで、比喩的に、自信満々な様子を表している。そして、(4b) の「グラスが水で満ちる」が、「隙間なくいっぱいになる」という出来事を「グラスの状態変化」という捉え方で類型化しているのと同じように、(5b) の「彼は自信に満ちている」も「隙間なくいっぱいになる」という出来事を「彼の状態変化」という捉え方で類型化していると考えられるのである[4]。つまり、(4b) と (5b) は、デ格かニ格かという違いはあるが、どちらも「満ちる」の状態変化用法に当たる。

以上のように、林 (1999) が取り上げている「彼は自信に満ちている」のような表現は、本稿のいう状態変化用法の 1 つに該当する。したがって、林 (1999) の調査から、「満ちる」が明治・大正期には既に状態変化用法を獲得していたことが分かる。

しかし、林 (1999) では、当該時期における「満ちる」の状態変化用法の全体像が明らかにさ

---

[2] なお、格体制についての研究ではないが、「満ちる」「満たす」の活用の変遷について論じた研究に、宮地 (1958)、三浦 (1969) がある。また、壁塗り代換とは異なるが、小田 (2012)(2013) は、中古語の動詞「換ふ」について、格の代換を起こすことを指摘している。

[3] 林 (1999) の挙げている近代以前の用例は、「年、進具に満 (ち)」（東大研究室蔵『恵果和上之碑文』）と「年進具ニ満チ」（高山寺蔵『恵果和尚之碑文』）である（林 1999:431 を参照）。しかし、これらの用例の「満つ」は「隙間なくいっぱいになる」という意味ではなく、「年齢がある区切りに達する」という意味であり、「自信に満ちている」のような状態変化用法の用例とは異なるのではないか、と思われる。この点については、川野 (2023:39) の注 4 も参照のこと。

[4] (5) の「満ちる」は (4) の「満ちる」と同じく、変化（位置変化・状態変化）を表すが、テイル形にして状態化した方が自然である。また、主節で用いる場合は「彼に→彼には」「彼が→彼は」のように主題化した方が自然である。これは、(5) が、「彼」の特徴（自信満々であること）を述べる属性叙述文になっているためだと考えられる（「属性叙述文」については益岡 (1987) を参照）。

なお、(5) のような「～ニ～ガ（彼には自信が満ちている）」と「～ガ～ニ（彼は自信に満ちている）」の交替現象は、川野 (2018)(2021) における「満ち欠け代換」に当たる。「満ち欠け代換」に当たる、現代語の用例の指摘は、宮島 (1972)、西尾 (1972)、まつもと (1979)、定延 (1993)、安 (1996) 等でもなされており、これらの研究の一部では、当該現象が位置変化用法と状態変化用法の交替であるという趣旨の指摘もなされている。

れているわけではない。林 (1999) の指摘により、状態変化用法の中でも (5b) のような文型（～ガ～ニ満ちる）については明治・大正期の資料に見られることが明らかになったが、(4b) のような文型（～ガ～デ満ちる）がどうだったのかは明らかにされていないからである（前述のように、林 (1999) の研究対象は「ニ格をとる言い回し」であるため、(4b) のような文型は研究対象に含まれていない）。また、(4b) や (5b) の文型以外にも「満ちる」の状態変化用法の文型があったのかどうかについても不明である。さらにいえば、林 (1999) では他動詞「満たす」は研究対象とされていないため、「満たす」の状態変化用法がどのような状況であったのかも明らかになっていない。

そこで本稿では、明治・大正期の資料から、自動詞「満ちる (満つ)」と他動詞「満たす (満つ)」の状態変化用法の用例を全て収集し、当該資料における状態変化用法の全体像を記述する。

3. 用例収集

調査には、国立国語研究所『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』を使用し、「中納言」の短単位検索により自動詞「満ちる (満つ)」と他動詞「満たす (満つ)」の用例を収集した。なお、当該動詞の表記には「満」「盈」「充」等があるが、表記の別なく調査対象とした（ただし、用例を引用する際を除き、本稿での表記は「満」で代表させて記す）。調査資料と検索条件は次の通りである。

(6) 調査資料（雑誌名、刊行年）

『明六雑誌』 1874 年・1875 年
『東洋学芸雑誌』 1881 年・1882 年
『国民之友』 1887 年・1888 年
『太陽』 1895 年・1901 年・1909 年・1917 年・1925 年
『女学雑誌』 1894 年・1895 年
『女学世界』 1909 年
『婦人倶楽部』 1925 年

(7) 検索条件

自動詞「満ちる」の検索： キー 語彙素読み「ミチル」
自動詞「満つ」の検索 ： キー 語彙素読み「ミツ」、品詞大分類「動詞」
他動詞「満たす」の検索： キー 語彙素読み「ミタス」
他動詞「満つ」の検索 ： キー 語彙素読み「ミテル」

上記 (7) の条件により収集された用例の中から、誤解析の用例や「ミツ」ではなく「アツ」の可能性が残る用例[5]、「満ち渡る」のような複合動詞の用例を除外した。また、翻訳作品の用例や、

[5] 「アツ」の可能性が残る用例とは、次のような用例である。
(i) 憲法發布二十年の祝賀會を開催するに當つて、議院を其會場に充つるの是非論が、大分はづんだそうであるが、つまらぬことが問題になるものだ。 (60M 太陽 1909_04005,350)

本文種別が「引用」である用例（文献等からの引用、記事に対する雑誌記者・編集者の説明等）、著者の生没年から判断して明治期より前の文章と考えられる用例も除外した[6]。

一方で、コーパス上では「アツ」や「アテル」として登録されている用例の中に、振り仮名等から判断して実際には「ミツ」であると思われる用例も見られた。次の (8) のような用例である。

(8) 瑞氣天に昂り、東風萬戸に充(み)つ　（60M 太陽 1895_01037,30740）

このような用例は先の (7) の検索条件では漏れてしまうため、別途、「キー　語形「アツ」」及び「キー　語形「アテル」」で検索し、検索結果の中から「ミツ」であると思われる用例を収集した。

以上の手順で得られた自動詞「満ちる (満つ)」と他動詞「満たす (満つ)」の用例のうち、「隙間なくいっぱいになる」「隙間なくいっぱいにする」という意味で用いられている用例で、かつ、状態変化用法の用例が、本稿の考察対象となる。該当する用例を次の (9)(10) に示す（(9) は状態変化用法の自動詞文の用例であり、(10) は他動詞文の用例である）。

状態変化用法（考察対象）

(9) 清新の香に満ちた初夏山村の静寂なカラーがナイーヴに描かれて居る。
（60M 太陽 1925_14028,28180）

(10) 氷醋酸一・六立方センチメートルとアルコール五十立方センチメートルを合せて炭酸瓦斯にて満たしたる瓶中に煮沸て置き　（60M 太陽 1901_14027,50180）

一方、次の (11)(12) のような、位置変化用法の用例は考察対象から外れる（(11) は位置変化用法の自動詞文の用例であり、(12) は他動詞文の用例である）。

位置変化用法（考察対象外）

(11) 一同は靡くやうに平伏すると、爽かな衣擦れの音が、大廣間の中に満ちた。
（60M 婦倶 1925_12083,31210）

(12) 先づ硝子器中に砂若くは石灰等の粉末を満たし、　（60M 太陽 1901_13031,148520）

また、「隙間なくいっぱいになる」「隙間なくいっぱいにする」という意味以外の意味で用いられている用例も、考察対象から外れる。たとえば、「月が満ちる」「条件を満たす」「1 メートルに満たない」等の用例は、いずれも対象外となる。

---

[6] 本文種別等については、間淵・近藤・服部・南雲 (2019) を参照のこと。また、用例の採集方針の検討にあたり、近藤 (2021) を参考にした。

4. 状態変化用法の文型

調査の結果、状態変化用法の用例が、自動詞「満ちる (満つ)」で 129 例、他動詞「満たす (満つ)」で 131 例得られた。本節では、これらがどのような文型で用いられているかを確認する。

状態変化用法の用例は、「グラスが水で満ちる」「彼が自信に満ちる（彼は自信に満ちている）」のように、変化後の状態を構成する事物（以下、「構成物」と呼ぶ）がどのような形式で表示されるかによって分類できる。このような観点から、調査資料中の状態変化用法の用例を分類すると、次のようになる。

構成物の表示形式による、状態変化用法の用例の分類

(a) 構成物が「ニ」で表示されるもの

(13) 清新の香に満ちた初夏山村の靜寂なカラーがナイーヴに描かれて居る。 =(9)

(14) 入り代りに高杉教授夫人が、不安に満ちた顔で、小原君が脉を觸れる横顔を見つめて居る。（60M 太陽 1925_01087,22350)

(b) 構成物が「ヲ以テ」で表示されるもの

(15) 塲内聽衆を以て満ち、立錐の席もない。（60M 太陽 1895_09031,97940）

(16) 下流より水源まで、山嶺水涯盡く森林を以て満たさる、（60M 太陽 1909_13014,56990）

(c) 構成物が「ニテ」または「デ」で表示されるもの [7]

(17) 氷醋酸一・六立方センチメートルとアルコール五十立方センチメートルを合せて炭酸瓦斯にて満たしたる瓶中に煮沸て置き =(10)

(18) 本書は花袋氏の隨筆集である、書き出しから三百七十四頁の終まで、旅の話で充たされてゐる。（60M 太陽 1925_09014,3020）

(d) 構成物を表す成分が現れていないもの

(19) 然し腹さへ充つればそれで宜いとて、大椀の飯を疾風が落葉を捲く如くに喫べたとて褒めたことでは無い。（60M 太陽 1925_13035,17670）

(20) 給仕をよんで大急ぎで盃をみたさせた。（60M 太陽 1925_09052,64870）

(e) 構成物主語の他動詞文

(21) 長い髪毛を拾つて、左の食指をキリキリ卷きにして、白く血の止つたふくらみをいくつも拵へてみた。それから急に解いてみた。見るまに血が指先を充たすために急いだ。（60M 太陽 1917_04038,9190）

(22) 最後に製圖が紙面の大部を充す様縮尺を撰ばざる可らず。（60M 太陽 1901_07038,25490）

(f) その他（用例数の少ないもの）

・構成物が「ニヨッテ」で表示されるもの …3 例

(23) 映畫を見にいつて驚くことは、そこにゐる入場者の九分までは、青春の男女によつて、満ちてゐることである。（60M 太陽 1925_10058,820）

・構成物が「デ以テ」で表示されるもの …1 例

[7] 「デ」は「ニテ」の音変化により成立したと考えられるため（松村 1959、倉持 1967 等）、本稿では「ニテ」と「デ」をまとめて扱うこととする。

(24) 大は中央の大官より小は地方の治安警察員に至るまで重なる職務を執るものは悉く日本人で以て充たして、（60M 太陽 1909_16014,11870）

・構成物が「ニシテ」で表示されるもの　…1 例

(25) 彼の六十萬坪の専管居留地は、一に日本人の來り住むを待つ。若し日本人にして漸やく之を充たさば、其の勢力は豈に朝鮮に於る釜山仁川の下にあらんや。

（60M 太陽 1901_09013,28200）

・構成物が「ニ於テ」で表示されるもの　…1 例

(26) 想ふに今日の天才は功名心に於て既に滿てり、（60M 女雑 1895_09004,48930）

上記の分類から、構成物を表す成分が出現していない (d)、構成物が主語になる (e)、用例数の少ない (f) を除くと、当該資料における「満ちる (満つ)「満たす (満つ)」の状態変化用法の文型として、次の (27) の文型が抽出できる。

(27) 状態変化用法の文型

自動詞「満ちる(満つ)」	他動詞「満たす(満つ)」
対象ガ　構成物ニ	対象ヲ　構成物ニ
対象ガ　構成物ヲ以テ	対象ヲ　構成物ヲ以テ
対象ガ　構成物ニテ・デ	対象ヲ　構成物ニテ・デ

以上から、林 (1999) の指摘している、構成物を「ニ」で表示する文型に加えて、「ニテ・デ」によって表示する文型も使用されており、現代語で見られる状態変化用法の 2 つの文型（2 節で示した (4b) と (5b)）が、明治・大正期の調査資料において既に出揃っていることが分かる。また、現代語ではほぼ使用されることのない「ヲ以テ」の使用も観察される [8]。「ヲ以テ」は漢文訓読に由来する語であり（山田 1935、松尾 1959、築島 1963、大坪 1967 等）、後述のように、調査資料の文体が文語体から口語体へ移行していくのに伴い、「ヲ以テ」から「ニテ・デ」へと移行したと考えることができる。

次に、上記 (27) の文型の分布を見ていきたい。以下の表 1 に自動詞「満ちる (満つ)」について示し、表 2 に他動詞「満たす (満つ)」について示す。

[8] 現代語において「ヲ以テ」という表現が使われないということではない（たとえば「本日をもって閉店します」等。現代語における「ヲ以テ」の意味用法については、森田・松木 (1989) や三井 (1995) 等を参照のこと）。しかし、「〜ヲ以テ満ちる」「〜ヲ以テ満たす」のような使用は、一般的ではないと思われる。

表 1 自動詞「満ちる (満つ)」の状態変化用法の文型の分布 [9]

	ニ		ヲ以テ		ニテ・デ		構成物無		その他	
	文語	口語	文語	口語	文語	口語	文語	口語	文語	口語
明六雑誌 1874・75										
東洋学芸 1881・82							2			
国民之友 1887・88	1		4				1			
太陽1895	3		1(1)	1	1		4			
太陽1901	4		3							
太陽1909	5	12	1			1				
太陽1917	1	16		1		2				
太陽1925	2	30						2		1
女学雑誌 1894・95	8		2						1	
女学世界 1909	2	9				1				
婦人倶楽部 1925	1	6								
計	27	73	11(1)	2	1	4	7	2	1	1

※ ( ) の数字は自動詞使役文の用例数で内数。

表 2 他動詞「満たす (満つ)」の状態変化用法の文型の分布

	ニ		ヲ以テ		ニテ・デ		構成物無		構成物主語		その他	
	文語	口語	文語	口語	文語	口語	文語	口語	文語	口語	文語	口語
明六雑誌 1874・75												
東洋学芸 1881・82									1			
国民之友 1887・88		1 (1)	1				1					
太陽1895	1		10 (7)	1 (1)			4					
太陽1901	2 (1)		10 (9)	1 (1)	1		2	1	6	1	1	
太陽1909	1 (1)	2 (2)	3 (1)	5 (4)		3 (2)	1	2				2 (1)
太陽1917	1 (1)	9 (9)	1 (1)	4 (4)		11 (11)		2		2		
太陽1925	1 (1)	5 (5)		3 (3)		5 (5)		3		6		1 (1)
女学雑誌 1894・95	6 (5)		1 (1)		1 (1)							
女学世界 1909		1 (1)	1 (1)	1 (1)								
婦人倶楽部 1925		2 (2)										
計	12 (9)	20 (20)	27 (20)	15 (14)	2 (1)	19 (18)	8	8	7	9	1	3 (2)

※ ( ) の数字は他動詞受動文の用例数で内数。

[9] 表中の「文語」は文語体の記事を指し、「口語」は口語体の記事を指す。文語体／口語体の区別は、『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』の本文情報に従った。表 2 も同様である。

表 1 と表 2 から、自動詞「満ちる (満つ)」と他動詞「満たす (満つ)」の状態変化用法の文型の分布に関して、次の 2 点が指摘できる。

まず 1 点目に、「ヲ以テ」と「ニテ・デ」の関係に着目すると、「ヲ以テ」で構成物を表示する文型が文語体の記事に集中しているのに対し、「ニテ・デ」で構成物を表示する文型は口語体の記事に分布している。田中 (2005) の調査によれば、『太陽コーパス』において口語記事の割合が文語記事の割合を上回るのは 1909 年からということであるが、表 1 と表 2 でも、概ねこの頃、それまでの「ヲ以テ」に代わって「ニテ・デ」が用いられるようになっていく様子がうかがえる。

2 点目に、構成物を「ニ」で表示する文型と、「ヲ以テ」や「ニテ・デ」で表示する文型を比べると、前者（「ニ」）は自動詞文の用例が多いのに対し、後者（「ヲ以テ」「ニテ・デ」）は他動詞受動文の用例が多いことが注目される。このことを、以下に整理して確認したい。それぞれの文型の、自動詞文、他動詞受動文、他動詞文、自動詞使役文の用例数をまとめると、次の表 3 のようになる。

表 3　各文型の、自動詞文・他動詞受動文・他動詞文・自動詞使役文の用例数

		ニ	ヲ以テ	ニテ･デ
対象主語	自動詞文	100	12	5
	他動詞受動文	29	34	19
対象目的語	他動詞文	3	8	2
	自動詞使役文	0	1	0

自動詞文と他動詞受動文は、どちらも、対象を主語として述べる文である。たとえば、自動詞文の「グラスが水で満ちる」でも、他動詞受動文の「グラスが水で満たされる」でも、対象「グラス」が主語になる（これに対し､他動詞文の「グラスを水で満たす」や自動詞使役文の「グラスを水で満ちさせる」では、対象「グラス」が目的語になる）。上記表 3 からは、対象を主語として述べる場合、構成物を「ニ」で表示する文型では自動詞文が主に使われるが、構成物を「ヲ以テ」や「ニテ・デ」で表示する文型では自動詞文よりも他動詞受動文が多く使われるという分布の特徴が観察できる。このような分布の背景については、現時点では分からないが、ここでは、構成物を「ヲ以テ」で表示する文型と「ニテ・デ」で表示する文型に共通の特徴がある（他動詞受動文に偏る）という点を押さえておきたい。

5. 文型の使い分け

本節では、4 節で確認した状態変化用法の文型が、どのように使い分けられているのかを、意味的な観点から分析する。

「満ちる (満つ)」及び「満たす (満つ)」の状態変化用法の用例は、いずれも「隙間なくいっ

ぱいになる」「隙間なくいっぱいにする」という出来事を表すが、より具体的な内容によって分類すると、次の①～⑦のように整理できる。

「満ちる (満つ)」「満たす (満つ)」が表す状態変化の内容

①空間や容器のスペースが物や人で埋まる。

(28) 場内聽衆を以て滿ち、立錐の席もない。 =(15)

(29) 下流より水源まで、山嶺水涯盡く森林を以て滿たさる、 =(16)

(30) 氷醋酸一・六立方センチメートルとアルコール五十立方センチメートルを合せて炭酸瓦斯にて滿たしたる瓶中に煮沸て置き =(10)

(31) やがて獲物に充ちた網は砂地にあがつて、昆布、わかめ、藻鹽草などが、ウヂヤウヂヤしてゐる中に、何匹となく跳ねてゐるのは小指位の白魚である、 (60M 女世 1909_08038,1460)

②紙面が文章で埋まる。

(32) 農工商業諸欄孰れも有益にして實際的なる記事を以て滿つ (60M 太陽 1901_14000,6680)

(33) 本書は花袋氏の隨筆集である、書き出しから三百七十四頁の終まで、旅の話で充たされてゐる。 =(18)

(34) 近着の米國雜誌は、ウイラードが病癒えて大英國より歸らんとするを歡迎せんとする準備の記事にみてり。 (60M 女雑 1894_31021,570)

③組織や役職が人員で埋まる。

(35) 議會は腐敗したり、議會は鼻持のならぬ臭氣紛々たる人物を以て滿つなど云ひて徒らに憤慨するとも (60M 太陽 1909_05007,1210)

(36) 成程大學教育の結果、今日、各官衙の吏僚といふやうなものは、年々新人物を以つて充されつゝあるかも知れぬ (60M 太陽 1909_04034,37910)

(37) 如何に露西亞の宮廷が親獨派で充たされ、皇后が獨逸の出であつて獨逸と戰ふを欲しないにせよ、 (60M 太陽 1917_06005,6100)

④頭の中がある事柄で占められる。

(38) 其日、吾儕の頭腦の内は朝から出逢つた種々雜多な人々で充たされて居た。 (60M 太陽 1909_05025,8700)

(39) 人々の心は、死人―殊に恐るべき病氣で一日の中に生命を失つた死人のことで充されてゐた。 (60M 太陽 1917_14040,155160)

(40) 況んや商界の俗臭は漸次に我か衣襟に感染し、我頭腦の大部は將に俗界の思想を以て充ちんとし、 (60M 女雑 1895_10017,43510)

⑤音や光、匂いが行き渡る。

(41) 彼は電車のある方へ急いだ、直ぐに、明るい灯に滿ちた大通りが彼の前に來た。 (60M 太陽 1917_09051,3640)

(42) 室内は料理場の匂や客の話聲や煙草の煙や食器の雜音に充ちてゐて、相變らず陰氣である。 (60M 太陽 1917_04041,74060)

(43) 清新の香に満ちた初夏山村の靜寂なカラーがナイーヴに描かれて居る。 =(9)

⑥感情や気分が行き渡る。

(44) 入り代りに高杉教授夫人が、不安に満ちた顔で、小原君が脉を觸れる横顔を見つめて居る。 =(14)

(45) 隨て全露の自治團體は最近に盡く政府反對の氣勢を以て滿されて居た。

（60M 太陽 1917_05013,57920）

(46) 其れから二三日といふものは、私はぢつと家の中に落付いてゐることが出來なかつた。たゞ彼女を憎いと思ふ心で滿されてゐた。 （60M 太陽 1917_12049,160580）

⑦ある性質を顕著に有する。

(47) そしてその小さな一間は世にも美くしく魅力に充ちた寢間と變つた。

（60M 太陽 1925_03035,30880）

(48) 佛蘭西人の懷いて居る是等の思想は、時々非常な誤謬に滿ちて居て、餘りに手つ取り早く眞實と信じて居るものに進み過ぎる弊はあるものゝ、 （60M 太陽 1917_05018,29740）

(49) 是に於て畫眼を開て之を觀察するとき、如何なるものも畫趣を以て充たされたるを見たり。あらゆるもの皆畫家の好材料とならざるもの無きを見たり。

（60M 女雜 1894_35004,44720）

次に、上記の①～⑦に、状態変化用法の文型がどのように分布しているかをまとめたものを、表 4 に示す。

表 4「満ちる (満つ)」「満たす (満つ)」が表す状態変化の内容と文型の分布

		ニ		ヲ以テ		ニテ・デ	
①	空間や容器のスペースが物や人で埋まる	12	自 6	24	自 2(1)	10	自 2
			他 6(4)		他 22(19)		他 8(6)
②	紙面が文章で埋まる	2	自 2	6	自 4	7	自 2
			他 0		他 2(2)		他 5(5)
③	組織や役職が人員で埋まる	0	自 0	11	自 1	3	自 0
			他 0		他 10(5)		他 3(3)
④	頭の中がある事柄で占められる	0	自 0	2	自 1	2	自 0
			他 0		他 1(1)		他 2(2)
⑤	音や光、匂いが行き渡る	8	自 7	0	自 0	0	自 0
			他 1(1)		他 0		他 0
⑥	感情や気分が行き渡る	82	自 58	6	自 2	2	自 0
			他 24(23)		他 4(4)		他 2(2)
⑦	ある性質を顕著に有する	28	自 27	6	自 3	2	自 1
			他 1(1)		他 3(3)		他 1(1)

※「自」は自動詞文、「他」は他動詞文を指す。「自」に付された ( ) の数字は自動詞使役文の用例数で内数。「他」に付された ( ) の数字は他動詞受動文の用例数で内数。

以下では、表 4 に基づき、状態変化用法の文型が意味的にどのように使い分けられているのかを考察したい。なお、考察の中心は、構成物を「ヲ以テ」／「ニテ・デ」で表示する文型と、構成物を「ニ」で表示する文型との間に、どのような違いがあるのか、という点になる。これは、表 4 の 3 種類の文型のうち、構成物を「ヲ以テ」で表示する文型と、「ニテ・デ」で表示する文型は、次の 2 点から、意味用法において同系列の文型と考えられるためである。まず 1 点目に、この 2 つの文型は、4 節で見たように、他動詞受動文で使われやすいという共通の傾向を持つ（これに対し、構成物を「ニ」で表示する文型は、自動詞文で使われやすい。4 節の表 3 を参照）。2 点目に、表 4 を見ると、構成物を「ヲ以テ」で表示する文型と、「ニテ・デ」で表示する文型は、どちらも①に多く分布しており、意味的な分布においても共通の傾向が見られる（これに対し、構成物を「ニ」で表示する文型は、⑥や⑦に多く分布している）。これらの点を踏まえると、構成物を「ヲ以テ」で表示する文型と「ニテ・デ」で表示する文型の違いは、文語体の記事に多く現れるか口語体の記事に多く現れるかという文体的な違いであり（4 節を参照）、意味用法に関しては同系列の文型と考えてよいだろう[10]。そこで以下の考察では、これらの文型と、構成物を「ニ」で表示する文型との間にどのような違いがあるか、という視点で考察を行う。

表 4 を見ると、構成物を「ヲ以テ」／「ニテ・デ」で表示する文型と、「ニ」で表示する文型は、意味的な分布において、はっきりと分かれているわけではないが、一定の傾向はあることが分かる。②～⑤については、用例数が少なく、傾向を読み取ることが難しいため、用例数がある程度見られる①⑥⑦で考えてみたい。先にも述べたように、構成物を「ヲ以テ」／「ニテ・デ」で表示する文型は①に多く分布しており、構成物を「ニ」で表示する文型は⑥⑦に多く分布している。では、①と⑥⑦とでは、意味にどのような違いがあるのだろうか。①⑥⑦の用例をそれぞれ再掲する。

①空間や容器のスペースが物や人で埋まる。

(50) 塲内聽衆を以て<u>滿ち</u>、立錐の席もない。 =(15)

⑥感情や気分が行き渡る。

(51) 入り代りに高杉教授夫人が、不安に<u>滿ち</u>た顔で、小原君が脉を觸れる横顔を見つめて居る。 =(14)

⑦ある性質を顕著に有する。

(52) そしてその小さな一間は世にも美くしく魅力に<u>充ち</u>た寢間と變つた。 =(47)

①では、対象と構成物が容器と中身の関係にあり、容器のスペースが中身で物理的に埋まることが表されている。たとえば (50) は、容器（塲内）が中身（聽衆）で埋まり、空いているスペースがないということが表されている。これに対し、⑥や⑦では、構成物と対象が、「感情・性質と、その持ち主」という関係にある。そして、持ち主を容器、感情・性質を中身に見立て、

[10] 松尾 (1959:68) は、「ヲ以テ」「ニテ」「デ」について、「室町時代の末には道具、つまり手段を表す用法では三者の間に全く区別がなくなってしまった」と述べている。本稿が問題としている「～ヲ以テ満ちる」「～ニテ・デ満ちる」のような、構成物を表す「ヲ以テ」と「ニテ・デ」も、用法が重なると考えてよいと思われる。

「容器のスペースが中身で埋まる」と述べることにより、比喩的に、対象が持つ感情や性質の、程度の甚だしさを表していると考えられる。たとえば (52) は、「寝間」を容器、「魅力」を中身に見立て、「容器（寝間）が中身（魅力）で埋まっている」と述べることにより、寝間が非常に魅力的であるということを表していると考えられる。①でも⑥⑦でも、「スペースが埋まる」という述べ方をしている点は同じであるが、⑥⑦では、そのような述べ方を通して、程度の甚だしさを表しているという点が、①とは異なるのである。

以上のことをまとめると、①のようにスペースが物理的に埋まることを表す場合は構成物を「ヲ以テ」／「ニテ・デ」で表示する文型が用いられやすく、⑥や⑦のように、比喩的に、対象が持つ感情や性質の程度の甚だしさを表す場合は、構成物を「ニ」で表示する文型が用いられやすい、と考えられる [11]。

6. まとめと今後の課題

本稿では、「「満ちる」「満たす」は、いつ頃、どのように、状態変化用法を獲得したのか」という問題を明らかにするための基礎調査として、明治・大正期の雑誌を調査し、当該資料における「満ちる」「満たす」の状態変化用法の様相について、以下のことを述べた。

(53)「満ちる (満つ)」「満たす (満つ)」の状態変化用法の文型として、(a) 構成物を「ニ」で表示する文型、(b) 構成物を「ヲ以テ」で表示する文型、(c) 構成物を「ニテ・デ」で表示する文型の 3 つが確認できる。このうち (b) と (c) は、意味用法において同系列の文型であると考えられ、調査資料の文体が文語体から口語体へと移行するのに伴い、(b) から (c) へと移行したと考えられる。

(54) スペースが物理的に埋まることを表す場合は、構成物を「ヲ以テ」／「ニテ・デ」で表示する文型が用いられやすい。これに対し、「スペースが埋まる」という述べ方を通して比喩的に、対象が持つ感情や性質の程度の甚だしさを表す場合は、構成物を「ニ」で表示する文型が用いられやすい。

現代語において、「満ちる」「満たす」の状態変化用法には、構成物を「デ」で表示する文型（e.g., グラスが水で満ちる）と、「ニ」で表示する文型（e.g., 彼は自信に満ちている）の 2 種類があるが、上記 (53) より、これらの文型が、明治・大正期の調査資料において既に出揃っていることが確認できる。また、(54) に示した、文型間の意味的な使い分けは、現代語における 2 種類の文型の使い分けにも、概ね当てはまると思われる [12]。したがって、「満ちる」「満たす」の状態変化用

[11] ②～⑤についても、同様の観点から文型の分布を解釈することができるかもしれない。しかし、用例数が少なく、今回の調査結果から傾向を読み取ることは難しいため、検討を保留したい。

[12] まつもと (1979:292) は、現代語の「～に乏しい」「～に満ちる」等の表現について、「ひとやものごとの内容的な側面を、量的に具体化している」と述べている。また、安 (1997:18-19) は、「～ガ～ニにあふれる・満ちる」のニ格名詞は抽象名詞であり、「～ガ～デあふれる・満ちる」のデ格名詞は具象名詞であるとしている。川野 (2021:132-135) は、「～ガ～ニ満ちる」ではニ格句の事物がガ格句の事物の内在物であり、「～ガ～デ満ちる」ではデ格句の事物がガ格句の事物の非内在物である、と述べている。これらの指摘は、(54) に述べた、明治・大正期の調査資料における 2 種の文型（構成物を「ニ」で表示する文型と、「ヲ以テ」／「ニテ・デ」で表示する文型）の使い分けと重なると思われる。

法は、明治・大正期の当該資料において、既に現代語とほぼ同じ状況にあったと考えることができるだろう。

今後は、近世から明治初期の資料の調査により、「満ちる」「満たす」がいつ頃、どのように、状態変化用法を獲得したのか、また、その変化の背景には何があったのかを明らかにすることが課題となる。

引用文献

安平鎬 (1996)「自動詞文における格の代換について―「発生」と「移動変化」をめぐって、「あふれる」を中心に―」『日本語と日本文学』23, 筑波大学国語国文学会 .

安平鎬 (1997)「comtents のニ格構文をめぐって」『筑波日本語研究』2, 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室 .

大坪併治 (1967)「格助詞 もて < 古典語 >」『国文学 解釈と教材の研究』12-2, 学燈社 .

奥津敬一郎 (1981)「移動変化動詞文―いわゆる spray　paint　hypallage について―」『国語学』127, 国語学会 .

小田勝 (2012)「動詞「着換ふ」の格支配について」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』31, 岐阜聖徳学園大学国語国文学会 .

小田勝 (2013)「中古語の動詞「換ふ」の格表示について」『表現研究』97, 表現学会 .

川野靖子 (2018)「「彼には積極性が欠けている」と「彼は積極性に欠けている」―満ち欠け代換の成立原理―」『埼玉大学紀要 教養学部』53-2, 埼玉大学教養学部 .

川野靖子 (2021)『壁塗り代換をはじめとする格体制の交替現象の研究―位置変化と状態変化の類型交替―』ひつじ書房 .

川野靖子 (2023)「動詞「満つ・満たす」の格体制―上代から中世まで―」『埼玉大学紀要（教養学部）』58-2, 埼玉大学教養学部 .

岸本秀樹 (2001)「壁塗り構文」影山太郎 (編)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店 .

倉持保男 (1967)「格助詞 にて < 古典語 >・で < 現代語 >」『国文学 解釈と教材の研究』12-2, 学燈社 .

近藤明日子 (2021)『コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究』勉誠出版 .

定延利之 (1993)「深層格が反映すべき意味の確定にむけて―対称関係・対称性を利用して―」仁田義雄 (編)『日本語の格をめぐって』くろしお出版 .

田中牧郎 (2005)「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」『国立国語研究所報告 122 雑誌『太陽』による確立期現代語の研究―『太陽コーパス』研究論文集―』博文館新社 .

築島裕 (1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会 .

西尾寅弥 (1972)『国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版 .

林謙太郎 (1999)「「レモンはビタミン C に富む」という表現をめぐって」近代語学会 (編)『近代語研究 10』武蔵野書院 .

益岡隆志 (1987)『命題の文法―日本語文法序説―』くろしお出版 .

松尾拾 (1959)「『もて』の研究」『国文学 解釈と教材の研究』4-9, 学燈社 .
松村明 (1959)「『にて』の研究」『国文学 解釈と教材の研究』4-9, 学燈社 .
まつもとひろたけ (1979)「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ―連語の記述とその周辺―」言語学研究会 (編)『言語の研究』むぎ書房 .
間淵洋子・近藤明日子・服部紀子・南雲千香子 (2019)「『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』（短単位データ 1.2）テキストの凡例と「中納言」表示項目について」
https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/doc/abstract-zasshi-201903.pdf
三浦和雄 (1969)「文法指導に必要な用例発見レポート (9) 満つ（四段・上二段・下二段）」『月刊文法』1-11, 明治書院 .
三井正孝 (1995)「現代日本語に於けるヲモッテ格の意味」『静岡英和女学院短期大学紀要』27, 静岡英和女学院短期大学 .
宮島達夫 (1972)『国立国語研究所報告 43 動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版 .
宮地幸一 (1958)「動詞「満つ・満たす」考」『国学院雑誌』59-10・11, 国学院大学 .
森田良行・松木正恵 (1989)『NAFL 選書 5 日本語表現文型』アルク .
山田孝雄 (1935)『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』宝文館出版 .

調査資料

国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』（短単位データ 1.2）
https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#zasshi

付記　本稿は JSPS 科研費 JP23K00541 の助成を受けたものです。